

浦一章「恋愛における最大の苦しみ——ダンテと宮廷風恋愛の伝統」（2014 年 12 月 6 日）

1) ダンテ・アリギエーリ（Dante Alighieri, 1265-1321）の『詩集』（*Rime*）をめぐるテキスト校訂と注解の状況、邦訳

(1) D. Alighieri, *Rime*, a cura di M. Barbi, in *Le opere di Dante: testo critico della Società dantesca italiana*, a cura di M. Barbi et al., Firenze, Bemporad, 1921, pp. 55-144.

(2) D. Alighieri, *Rime della «Vita Nuova» e della giovinezza*, a cura di M. Barbi e F. Maggini, Firenze, Le Monnier, 1956.

(3) *Dante's Lyric Poetry*, 2 vols (vol. 1, Text and Translation; vol. 2, Commentary), ed. by K. Foster and P. Boyde, Oxford, Clarendon Press (Oxford University Press), 1967.

(4) D. Alighieri, *Rime della maturità e dell'esilio*, a cura di M. Barbi e V. Pernicone, Firenze, Le Monnier, 1969.

(5) D. Alighieri, *Rime*, Edizione Nazionale a cura di D. De Robertis, 3 voll. in 5 tt., Firenze, Società dantesca italiana - Le Lettere, 2002.

(6) D. Alighieri, *Rime*, edizione commentata a cura di D. De Robertis, Firenze, SISMELEd. del Galluzzo, 2005.

(7) D. Alighieri, *Rime giovanili e della Vita Nuova*, a cura di T. Barolini, Milano, Rizzoli, 2009.

(8) D. Alighieri, *Rime*, a cura di C. Giunta, in Id., *Opere*, vol. 1, ed. diretta da M. Santagata, Milano, Mondadori, 2011, pp. 3-744.

(9) ダンテ『全集』中山昌樹訳、東京、日本図書センター、1995 年（復刻版、初版 1924–25 年）（第 4 巻『新生 詩集』）

2) 「恋愛の苦しみをめぐるテンツォーネ」（tenzone del “duol d’amore”）ーダンテ・ダ・マイヤーノ（Dante da Maiano）およびダンテ・アリギエーリによる 5 篇のソネットが展開する恋愛談義（1280 年代）。

・テキスト伝承の問題点：5 篇のソネットを伝える、1527 年の刊本『ジュンティ版古歌集』（Giuntina di rime antiche）

	(I) <i>Per pruova di saper</i>	(II) <i>Qual che voi siate</i>	(III) <i>Lo vostro fermo dir</i>	(IV) <i>Non canoscendo</i>	(V) <i>Lasso, lo dol</i>
『ジュンティ版古歌集』	ダ・マイアーノ (M)	アリギエーリ (A)	A	A	M
バルビほか	M	A	M	A	M
サンタンジェロほか	A	M	A	M	A

・テンツォーネの内容

第 1 ソネット（9-11 行）：才知をかたむけて詠んだこの歌によって訊ねましょう。愛が惹き起こす最大の苦しみとは何なのか、あなたのご意見にしたがって、仰ってください。

第 2 ソネット（12-14 行）：私の知るかぎり、愛しながらも、愛〔し返〕されない者が心に比類のな

い苦しみを宿すことは、確かだと思われます。

第 3 ソネット（9-11 行）：あなたは愛しながら愛し返されないことが愛のもっとも大きな苦しみだと仰います。しかし、もっと大きな苦しみがあると、多くの人が述べております。

第 4 ソネット（9-11 行）：友よ、私はほんとうに愛情をこめて愛したことがあるから、その点は確かだ。愛する者が愛し返されないなら、もっとも大きな苦しみを味わうことになる、しっかりとわきまえておかれよ。

第 5 ソネット（9-14 行）：賢明なる友よ、あなたの主張がより明確になるように、それを支持する書物を挙げつつ論じてください。論じながら、あなたの主張がより明確になったところで、どの悲しみがより大きな苦しみを惹き起こすのか、はっきりとさせましょう。証拠や実例をきっちりと示しながら。

⇒「片思いの苦しみ」を上回る、恋愛の苦しみとは何か？ 第 3 ソネットが含む反論は議論を長引かせるための口実？ 第 3 ソネットが「多くの人」に言及しているのは一種のマナー（「自分の意見」を声高に主張しない、ある種の謙遜）の問題なのか？

3) 方法的反省：「手がかりが 1 つだけでは〔単なる〕偶然かもしれないが、2 つあれば“ひょっとすると”と考えてみることはできる。手がかりが 3 つになれば蓋然性が生じ、4 つ以上になればある種の合理的確実性（というか、とにかく研究の場で報すべきある可能な体系）が生みだされることになる。」（ロベルト・アントネッリ）

⇒最低 3 つないしは 4 つの類例があれば、仮説は説得力をもつ。

4) アンドレーアス・カペラーヌス（Andreas Capellanus, 1185 年から 87 年にフランス王の宮廷に滞在し、シャンパーニュ伯夫人マリーの礼拝堂付き司祭を務めたと思しき人物）『宮廷風恋愛について』（De amore, 12 世紀末ないしは 13 世紀最初の数 10 年間）。ちなみに、シャンパーニュ伯夫人マリー（Marie de France [Marie de Champagne], 1145-1198）の父はフランス王ルイ 7 世、母親はアキテーヌ公アリエノール（今日作品が伝わっている最古のトルバドゥール、ギヨーム 9 世 [1071-1126] の孫）。⇒『宮廷風恋愛について』の邦訳としては、以下の 2 点が利用可能。

アンドレーアス・カペラーヌス『宮廷風恋愛について』瀬谷幸男訳、東京、南雲堂、1993 年

アンドレアス・カペラヌス『宮廷風恋愛の技術』野島秀勝訳、東京、法政大学出版局、1990 年

⇒『宮廷風恋愛について』第 2 巻 7 章「恋愛に関するさまざまな判定」（De variis iudiciis amoris）、一連の「恋愛問題」を集録し論じる。しかし、「片思いの苦しみ」を上回る苦しみに関しては、手がかりが見出されない。

浦一章「恋愛における最大の苦しみ——ダンテと宮廷風恋愛の伝統」（2014 年 12 月 6 日）

←むしろ、手がかりは『宮廷風恋愛について』第 1 巻 1 章冒頭部に見られる：

愛とは異性の美しい容姿を見て、過度に思いをめぐらすことから内側に生じる情念（＝苦しみ）である。

この情念のため、人は相手の抱擁を、ほかの何にもまして得たいと望み、その人を抱きながら、両者の意志に基づきつつ、愛がくだすすべての命令を果たしたいと欲するようになる。

愛が情念（＝苦しみ）であることを理解するのはたやすい。愛が秤の両側に等しく釣合う以前は、これ以上に大きな苦しみはない。それというのも、愛が望みの結果を遂げられないのではないか、苦労が水泡に帰してしまうのではないかと、恋する者は常に心配するからである。人々の噂を懼れ、何らかの仕方では妨げになりかねないすべてのものを懼れる。成熟に達していないものは少しの障害で衰退してしまうからである。貧しい男なら、[意中の] 婦人から自分の貧しさが蔑まれはしないかと心配しよう。醜い男なら、器量のよくないことが軽蔑されはしまい、婦人がもっとと美男の恋人と結ばれるのではないかと心配する。裕福な男なら、過去の貪欲さがひょっとして自分の妨げにはなるまいかと心配する。本当のことを言えば、いかなる者も片思いの恋人の不安を語り尽くすことはできない。かくして、秤の片側にのみ載せられ、片思いの愛と呼ばれる愛は、苦しみなのである。

双方の愛が成熟に達した後も、不安は相変わらず湧き起こる。恋人の双方が、多くの労苦の末に獲得したものが、誰か他人の働きによって失われはすまいかと懼れるからである。このことは、希望に裏切られた者が自分の労苦はなんの実りをももたらすまいと考える場合よりも、ずっと重く悲しいことだと思われる。なぜなら、すでに獲得したものを失う方が、期待しているだけの富をなくすより辛いことだからである。また、恋する者は何らかのことで相手の気分を害しはすまいかと心配する。語り尽くすことがきわめて困難なことのすべてを懼れるのである。

5) アンドレアス・カペラーヌス『宮廷風恋愛について』のイタリアにおける普及

- ・2 系統 5 つの写本によって伝わる、14 世紀トスカナ語訳（Riccardiano 2317, Riccardiano 2318, Laurenziano Pluteo XLI.36, Palatino 613; Barberiniano latino 4086 [già XLVI 28]）
- ・13 世紀シチリア派の詩人たちによる、『宮廷風恋愛について』の活用

6) ジャコモ・ダ・レンティーニ（ホーエンシュタウヘン家の宮廷で、1230 年代から 1240 年代初め頃まで、役人および詩人として活動していたと思しき人物。シチリア派のリーダー的存在）における、アンドレアス・カペラーヌス『宮廷風恋愛について』の痕跡

・ソネット *Amor è uno disio*（1-8 行）：愛とは、過剰なまでの大きな欲び・美を通じて心から生まれる願望である。目が最初に愛を生みだし、心がそれに糧を与える。確かに、愛すべき対象を見ることなく人が愛を抱くことも時にはあるが、激しく胸を締めつけるあの愛は目に映じたものから生まれるのである。⇒「権威」として尊重されているアンドレアス・カペラーヌス。一方ジャコモは、ジャウフレ・ルデル（12 世

紀前半に活動したトルバドゥール）のようなケースも視野に含めつつ立論している。

7) ジャウフレ・ルデルの「伝記」と代表作

- ・「伝記」：ジョフレ・ルデル・デ・ブライアはたいそう高貴な人物、ブライアの領主であった。見たこととはなかったが、アンティオキアから来る巡礼たちの語る賛辞を聞きつけて、トリポリ伯爵夫人に恋をした。彼女を題材に妙なる調べとともに多くの詩を書いたが、ことばはありきたりだった。彼女に会いたいと望み、十字軍になって海に乗り出したが、船中で病を得た。トリポリのさる宿に死人として [= 死人の状態、意識不明の状態] 運ばれていった。伯爵夫人に知らせが送られると、彼女は彼の処、彼の臥処にやって来て、彼を腕に抱きしめた。彼女が伯爵夫人だと知ると、彼はたちどころに聴覚と嗅覚 [= 意識] を取戻し、彼女を見るまで命を長らえさせてくださった神に感謝した。かくして彼は夫人の腕の中で死んだ。彼女は盛大な葬儀を行ない、テンプル騎士団の教会に彼を葬らせた。そして、その日に、彼女は彼の死を悼んで修道女となった。

←第 2 回十字軍（1147-48）に参加したことは事実だが…

- ・カンツォーネ *Lanquan li jorn son lonc en mai* [a⁸ b⁸ a⁸ b⁸ c⁸ d⁸ (coblas unissonans) + tornada (3 versi)]（16

写本による伝承。3 写本は曲を伝承）

Lanquan li jorn son lonc en mai

m'es bels dous chans d'auzels de lonh,

e quan me sui partitz de lai,

remembra'm d'un'amor de lonh:

vau de talan embronc e clis,

si que chans ni flors d'albespis

no'm platz plus que l'iverns gelatz.

Ja mais d'amor no'm jauzirai

si no'm jau d'est'amor de lonh,

que gensor ni melhor no'n sai

vas nulha part, ni pres ni lonh.

Tant es sos pretz verais e fis

qe lai el reng dels sarrazis

fos ieu per lieis chaitius clamatz!

Iratz e jauzens m'en partrai,

s'ieu ja la veirai l'amor de lonh;

mas non sai quoras la veirai,

浦一章「恋愛における最大の苦しみ——ダンテと宮廷風恋愛の伝統」（2014 年 12 月 6 日）

car trop son nostras terras lonh:
assatz i a pas e camis,
e per aisso no'n sui devis...
Mas tot sia cum a Dieu platz!
Be'm parra jois qan li querrai,
per amor Dieu, l'alberc de lonh:
e, s'a lieis platz, alberguarai
pres de lieis, si be'm sui de lonh.
Adoncs parra l parlamens fis,
quan drutz lonhdas er tant vezis
qu'ab cortez ginh jauzis solatz.
Ben tenc lo Senhor per verai
per q'ieu veirai l'amor de lonh,
mas per un ben qe m'en eschai
n'ai dos mals, quar tant m'es de lonh.
Ai! car me fos lai pelegrís,
si que mos fustz e mos tapis
fos pels sieus belhs huelhs remiratz!
Dieus, que fetz tot cant ve ni vai,
e formet sest'amor de lonh,
mi don poder, que cor eu n'ai,
qu'ieu veia sest'amor de lonh,
veraiamen, en tals aizis,
si que la cambra e'l jardís
mi resembles totz temps palatz.
Ver ditz qui m'apella lechai
ni desiron d'amor de lonh,
car nulhs autre jois tant no'm plai
cum jauzimens d'amor de lonh.
Mas so q'eu vuelh m'es atahis
qu'enaissi m fadet mos pairis
q'ieu ames e non fos amatz.

Mas so q'ieu vuoill m'es atahis.

Totz sia maudit lo pairis

qe'm fadet qu'ieu non fos amatz!

五月になって日も長くなる頃、遠くから来た鳥たちの甘美な歌声が私にはうれしい。そして、あの地から思いを引き離しても、私には遙か遠くの恋人のことが忘れられない。[すると] 私はもう気分も落ちこみ、俯^{うつむ}きながら歩いてゆく。もはや歌もサンザシの花も、凍てついた冬と同様、私を喜ばせない。

もし、あの遙か遠くの恋人から喜びを得ることがないなら、私が愛の喜びを得ることなど決してあるまい。あの人以上に美しい婦人を、あの人よりもっとすぐれた婦人を、近くであろうと遠くであろうと、どこにも私は知らないから。彼女のほんとうに卓越した価値はあまりに大きいから、彼女のためなら、かなたのサラセン人たちのあの国で、奴隷だと宣告されようとも本望というものだろう。

もし、いつの日かあの人に、あの遙か遠くの恋人に会えるなら、私は悲しみながらも喜びつつ旅立つことだろう。だが、彼女に出会えるのはいつのことなのか、私にはわからない。ふたりの国はあまりに遠く隔てられているからだ。たくさんの道のりがあり、それゆえに私には予想も立たない。だが、すべては神の思し召しのままになるがよい。

「お願いですから、遠くからの旅人に宿をお与えください」と、彼女に懇願する時が来れば、きっと私の喜びが生まれることだろう。そして、彼女が許してくださるなら、私は彼女のそばに宿ろう。たとえ今は遠く離れていようとも。それゆえ、私という遠く離れている恋人が近づいて、優雅に振舞いながら共に時をすごすことができるなら、[ふたりの間では] 理想的な会話がなされることだろう。

主なる神が真であることを私は疑わない。その神のお蔭で、私にはあの遙か遠くの恋人にまみえることができるだろう。だが、何かよいことが一つあると、私には悪いことが二つ生じる。あの人私がから遠く隔たっているからだ。ああ、かの地に巡礼としてゆけたなら！ 私の巡礼杖とマントが彼女の美しい眼にとまるように。

来りては行きすぎてゆくすべてのものを創造なさり、遙か遠くのこの恋人をお創りになられた神よ、どうか私に力をお授けください、この遙か遠くの恋人に本当にまみえることができるように。私はそうしたいと望んでいるのですから。部屋や庭がいつも宮殿だと感じられるほどの、ふさわしき時と場所に於て [まみえることができるように]。

私のことを、遙か遠くの恋人を貪欲に望む者と呼ぶ人が誰かあるなら、まことに真を穿った発言である。ほかのどんな喜びも、遙か遠くの恋人から得られる喜びほどには、私を楽しませないからだ。だが、私が欲しているものは禁じられている。わが代父（名付け親）のせいで、愛しつつも愛し返されないように私は宿命づけられてしまったからだ。

だが、私が欲しているものは禁じられている。私が愛されないように宿命づけた代父は、すっかり呪われてしまうがよい。

浦一章「恋愛における最大の苦しみ——ダンテと宮廷風恋愛の伝統」(2014年12月6日)

8) ジャコモ・ダ・レンティーニによる模倣と変更

- ・カンツォーネ *S'io doglio no è meraviglia* [a⁸ b⁸ a⁸ b⁸ c⁸ b⁸] ⇐カンツォーネ *Lanquan li jorn son lonc en mai* との形式的類似に注意。ジャコモのカンツォーネが、ジャウフレ・ルデルのカンツォーネと同じ曲に合わせて歌われた可能性が大きいと見る研究者もある。

S'io doglio no è meraviglia
e s'io sospiro e lamento:
amor lontano mi piglia
dogliosa pena ch'eo sento,
membrando ch'eo sia diviso
di vedere lo bel viso
per cui peno e sto 'n tormento.
Allegranza lo vedere
mi donava proximano,
lo contrario deggio avere
ch'eo ne son fatto lontano:
s'eo veggendo avea allegranza,
or no la veggio ò pesanza
mi dstringe e tene mano.
Lo meo core eo l'aio lassato
a la dolce donna mia:
dogliomi ch'eo so' allungiato
da sì dolce compagnia;
co'madonna sta lo core,
che de lo meo petto è fore,
e dimora in sua bailia.
Dogliomi e adiro sovente
de lo core che dimora
con madonna mia avenente,
in sì gran bona-ventura:
odio e invidia tale affare,
che con lei non posso stare

né veder la sua figura.

Sovente mi doglio e adiro,
fuggir mi fanno allegrezze;
tuttavia raguardo e miro
le sue adornate fattezze,
lo bel viso e l'ornamento
e lo dolce parlamento,
occhi, ahi, vaghi e bronde trezze.

私が悲しみ溜息について嘆いても驚くには及ばない。麗しい^{かんばせ}顔容の眺めから自分が離れているの思い出す時、遙かなる「地の恋人への」愛は私が感じる激しい苦しみとなって私をとらえる。あの麗しい顔ゆえに、私は苦しみ煩悶しているのだ。

近くまみえることは私に喜びを与えてくれていたが、遠くへだった今となつては反対のもの(=悲しみ)を味わわねばならない。会えた時には喜びを享受したとするなら、彼女に会えない今は悲しみを味わっている。悲しみがしっかりと私の手を握り放さない。

私はわが優美なる恋人のもとに自分の心臓(心)を置き残してきた。あのように甘美な連合いから遠く離れていることを私は苦しんでいる。胸を飛びだした心臓(心)はわが貴婦人とともにあり、彼女の支配下にある。

私は苦しむ。そして、わが麗しの貴婦人とともにあり、あのような好運を享受している心臓(心)に対し、しばしば腹を立てる。そのようなことに私は憎悪と羨望を覚える。私とは言えば、彼女とともにいることがかなわず、彼女の姿を見ることができないからだ。

しばしば私が苦しみ、腹を立てると、[怒りや苦しみのせいで] 私からは喜びが消え去ってしまう。[それでも] 私はずっと彼女の美しい姿や麗しい顔、優雅さ、ああ、美しい目と金の編み毛を[想像の中で]見つめ眺めている。

⇒ジャウフレ・ルデルの詩的世界は「いまだ獲得されざる眺め」を原理として構成されているが、ジャコモ・ダ・レンティーニの詩的世界は「失われし眺め」を原理として構成されている。ジャコモは、形式的にはルデルを模倣しつつも、「遙かなる愛」(amor de lonh / amor lontano)の中味に関しては大きな変更を加え、ルデル的な「成就前の愛の苦しみ」を180度転換し「成就後の愛の苦しみ」に置き換えている。
⇒ジャコモはこのカンツォーネでもアンドレアス・カペラーヌスの「権威」を尊重し、その下位にルデルを位置づけている。

9) ジャコモ・ダ・レンティーニにおけるトリスタン伝説の痕跡

- ・ソネット *Io m'aggio posto in core*

浦一章「恋愛における最大の苦しみ——ダンテと宮廷風恋愛の伝統」（2014 年 12 月 6 日）

Io m'aggio posto in core a Dio servire,
com'io potesse gire in paradiso,
al santo loco ch'aggio audito dire,
o' si mantien sollazzo, gioco e riso.
Sanza mia donna non vi voria gire,
quella ch'à blonda testa e claro viso,
che sanza lei non poteria gaudere,
estando da la mia donna diviso.

Ma no lo dico a tale intendimento,
perch'io peccato ci vellesse fare;
se non veder lo suo bel portamento
e lo bel viso e 'l morbido sguardare:
che 'l mi teria in gran consolamento,
veggendo la mia donna in ghiora stare.

神に奉仕しようと私は心に決めた。それは天国に入るためであつたが、あの聖なる場所では愉しみや
遊び、笑いが絶えることがないという。だが、わが意中の婦人が、金色の髪をした、まぶしいばかりの
顔容のあの婦人が、ともにいないのであれば、そこには行きたいと思わないだろう。あの婦人から遠
く離れていっしょにいなかったなら、私は遊びに浸ることなどできないだろうからである。

だが、罪を犯そうという意図からこんなことを言っているのではない。ただ、彼女のすぐれた振舞い、
麗しい顔、やさしい眼差しを見たいと望むからなのである。あの婦人が天の栄光に浴するを見られたら、
それはわが大きな慰めとなるだろう。

⇐『散文トリスタン物語』（fr. 757 de la BN de Paris）の一節との類似：「いつもそのような暮らしをするた
めなら、彼ら（＝トリスタンとイゾルデ）は神に向かって天国も要りませんと言ったことだろう。」

⇐ペルール『トリスタン物語』（第 2605 行）との類似：「まぶしい顔のイゾルデ」（«Yseut o le cler vis»）

⇒ソネット *Io m'aggio posto in core* の話者はトリスタンと考えられる。「成就後の愛の苦しみ」を極端な形
で体験したトリスタンも、ジャコモ・ダ・レンティーニの「権威」になりえた。

10) ナポリ時代のボッカッチョ（Giovanni Boccaccio, 1313 ? - 1375）の作品『フィローコロ』（*Filocolo*,
1336-38 ca.）、第 4 巻に含まれた 13 の「恋愛問題」（questioni d'amore）。

⇒2 番目の問題：恋愛の「成就後」1 ヶ月もたたないうちに恋人を失ってしまう女性と、恋人との肉体的な
交わりを「成就」できない女性。一方には追放に処せられた恋人を追いかけてゆき再会する術がなく、他
方は肉体的にひとつになるためにさまざまな策を弄するものの、すべてが失敗に終わる。この 2 人の婦人

のうち、より苦しんでいるのはどちらであろうか。

⇐裁定者フィアンメッタの判決：「恋人を失った女性の方がより大きな苦しみに喘ぎ、[気まぐれな] 運命
からより大きな危害を加えられたと考えましょう。（...）明らかなことですが、甘いものを決して味わった
ことがなければ、苦いものもまだ知らないということですから。」

先行研究による指摘：(1) ジャン・ブレテル（Jean Bretel, 1210 ca. - 1272）とアダン・ド・ラ・アル（Adam
de la Halle, 1245 ca. - 1287 ca.）の間で行なわれたテンツォーネ；(2) アダン・ド・ジヴァンシー（Adam de
Givenci, 1220 ca. - 1270 ca.）とギヨーム・ル・ヴィニエール（Guillaume le Vinier、活動期 13 世紀後半）の
間で行なわれたテンツォーネ。前者では、アダン・ド・ラ・アルに対して、ジャン・ブレテルが「恋する
男が意中の婦人に懇願する時、より懼れなければならないのはどちらであろうか。拒否されることだろうか、
彼女をわがものとした後で失うことだろうか」と尋ねる。後者では、アダン・ド・ジヴァンシーとギヨーム・
ル・ヴィニエールが、「すぐに失われてしまうことになる喜びを享受することか、決して喜びに浸ることな
く常に高貴に待ち続けることか」、どちらがましか、と論じ合う。

⇒アンジュー家支配下のナポリにおいて、フランスの詩人たちが読まれていた可能性。とくに、アダン・ド・
ラ・アルは 1283 年イタリアに移動し、ほぼ確実にナポリのアンジュー家に公式に仕えることとなり、死ぬ
までナポリにとどまった。

⇐しかし、指摘されている 2 つのテンツォーネでは、フィアンメッタの判決を説明しきれない。ボッカッ
チョがアンドレアス・カペラーヌスを利用したと考えた方が説明としては経済的であろう。

⇐しかも、写本「Riccardiano 2371」（フィレンツェ）に含まれた『宮廷風恋愛について』のトスカーナ語訳
をボッカッチョに帰属させる、最近の研究もある（*Libro d'amore attribuibile a Giovanni Boccaccio*, a cura di
B. Barbiellini Amidei, Firenze, Accademia della Crusca, 2013）。